

B O O K S

生

物の多様性とはどんなものなのか？どうすれば保全されるのか？という問いは、私たちのような生き物を扱う分野の人なら誰もが抱くものだろう。

それについて、本書では、生物間の関係の多くはそもそも「曖昧」かつ多義的なものであることを説き、生物の多様性を保全するにはどんなことに着目すべきか、という問いに一つのヒントを与えてくれる。



本書では全般を通して、生物の多様性がどのように成立してきたのか、生物の多様性とはどんなものなのかについて、幾つかの具体例を挙げながら解説している。また筆者は、生態系について二つの「曖昧」を挙げている。

第一に生物どうしの関係は、一対一には緊密に結びついておらず、条件次第で大きく変わりうる「曖昧」なものであること。第二に個々の種や個体群の歴史の中で、生物間相互作用が重要な意味を持つのは「非常」時のごく限られた期間であり、そのほかの多くの「通常」時に見られる関係は「曖昧」なものであること。

その中で私が特に興味を持ったの



著者：川那部浩哉

発行：（社）農山漁村文化協会

は、キャッサバとシロアリとの関係の例である。

キャッサバの原産地である南アメリカにおいては、シロアリとの長い共存の結果、キャッサバはシロアリに対する忌避物質を分泌する性質を遺伝的に備えた。しかし、その性質は全く共存の歴史のないアフリカのシロアリに対しては効果が無く、キャッサバはそのシロアリに食われてしまうという。

この例から、現在の種の性質や遺伝的多様性は、過去の生物間相互作用によって作られたものであることが述べられている。このことは、ある地域における現在の生育種・生息種から構成される生態系には、過去の歴史の中で成り立った生物間相互作用があることを意味している。また、現在の生物間相互作用が未来の種・遺伝的多様性の発展につながる

可能性が大いにあると言える。このような視点は、私たちが生態系を考える際の重要なポイントである。

本書は、筆者が雑誌や講演会等で述べた内容を寄せ集めた形であるため、重複する内容が多く見られるが、次の一文は生物間相互作用を見いだすための方法として繰り返し述べられており、生物多様性の保全を考えるうえで印象深いものであった。

『通常状態における各生物や生物群集の性質を、一層深く論理的に解析して、そこに起こっている一見説明不能な現象を見つける必要があるでしょう。その「説明不能」の現象こそ、進化の歴史を示し、かつ現在の生物群集を本当に成り立たせているものに違いないのですから。』

（本社自然環境調査室・彦坂洋信）

著者紹介

川那部 浩哉(かわなべ ひろや)

1932年京都府生まれ。1955年京都大学理学部卒業。1960年京都大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。前京都大学生態学研究センター長・教授。群集生態学専攻。現在、琵琶湖博物館長。

編著書『原色日本淡水魚類図鑑』(1963, 1976, 保育社)『日本の淡水生物』(1980, 東海大学出版会)『偏見の生態学』(1987, 農文協)『共生と群集の組織』(1993, オクスフォード大学出版会)他。